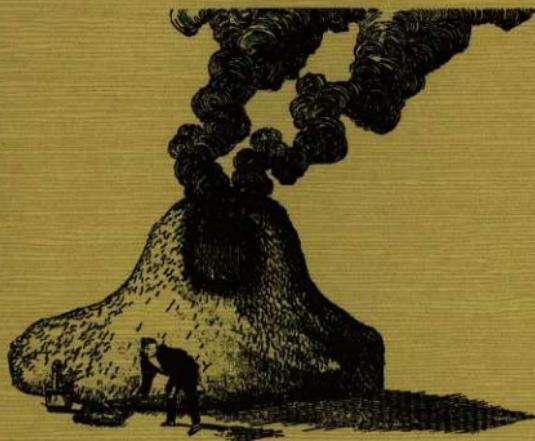


櫛形町文化財調査報告書 No.19

前原 G 遺跡

——新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書——



2000. 2

櫛形町教育委員会
山梨県新環状・西関東道路建設事務所

前原 G 遺跡

—— 新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書 ——

2000. 2

櫛形町教育委員会
山梨県新環状・西関東道路建設事務所



調査区より村前東A遺跡を望む（南東より）



調査区より角力場第2遺跡を望む（北より）

序 文

櫛形町は甲府盆地の西縁に位置し、櫛形山の東麓に発達した町であります。釜無川右岸西方一帯は駿西地方と呼ばれ、本町は古来からこの地方の政治・経済・文化の中心地として栄えてきました。

櫛形山山麓の台地からは、石器や縄文・弥生時代の土器が出土したり、住居跡なども多く発見されています。また、古墳も駿西地方唯一の前方後円墳である物見塚古墳をはじめ六科丘古墳、鎧物師屋古墳、狐塚古墳などがあり、これらの古墳とそこから出土した鉄剣、銅鏡、管玉、白玉などによってすでに5世紀前半には、この地方に有力な支配者が存在していたことが伺えます。

平安時代に入ると甲斐源氏の流れをくむ小笠原長清が、現在の櫛形町小笠原を所領し、長じて京都に移り住み、その子孫は各地で守護藩主となり「小笠原流」の名家としての名を広めました。このことから当町は『小笠原氏発祥の町』といえましょう。

さらに、平成6年には、下市之瀬の鎧物師屋遺跡から、国の重要文化財に指定された土偶など205点が出土しましたが、美術的、学術的にも価値の高いものであると評されています。

この度、中部横断自動車道、櫛形・若草インターチェンジへのアクセス道路として新山梨環状道路が建設されることに先立ち、櫛形町吉田地籍で当地の埋蔵文化財である前原G遺跡の発掘調査を行いました。その結果、古墳時代の竪穴状遺構をはじめ、江戸時代後期から昭和初期にかけての粘土採掘坑が発見されました。今回発掘された粘土採掘坑は隣接する若草町の特産品である屋根瓦を作るための原料の粘土を採掘した跡で、近代の地域産業史を明らかにする上でも貴重な発見がありました。

今回の調査において多くの重要な事柄が発見され、さらに従来の知見に付け加えるべき新たな事実も確認することが出来ましたことは本書に述べる通りであります。

最後になりましたが、今回の発掘調査、ならびに報告書作成にあたりご指導、ご協力をいただきました皆様に心から感謝申し上げます。

平成12年2月

櫛形町教育委員会
教育長 藤巻 進

例　　言

1. 本書は新山梨環状道路建設に伴い山梨県新環状・西関東道路建設事務所の委託を受け檍形町教育委員会が実施した山梨県中巨摩郡檍形町吉田字前原577-1他に所在する前原G遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成11年2月1日～3月31日までの2ヶ月間に亘って実施した。また出土品の整理・報告書の作成はその他の事業の合間をぬって平成11年4月1日～平成12年2月末まで断続的に行った。
3. 調査にあたった組織・調査参加者は以下の通りである。

調査主体者	檍形町教育委員会	教育長　藤巻　進
調査担当者	山下　大輔（檍形町教育委員会　嘱託職員）	
調　　査　員	若林　初美・小口妙子（整理作業時）	
事　　務　局	檍形町教育委員会文化財係	
調査参加者	柏川泰美・飯久保初美・入倉妙子・入倉とらえ・加藤由利子・川崎しげ美・神田久美子・北村利恵・小松スガ江・桜田和子・桜田定子・桜田みさえ・鈴木アサ江・長沼豊子・生原浩美・由井伴三	
4. 報告書作成に關わる編集は山下・若林・小口があたり、執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第2節、第Ⅳ章第2節……山下
第Ⅲ章第1節、第Ⅳ章第1節……………小口
5. 本報告書に關わる出土品及び記録図面、写真等は檍形町教育委員会に保管してある。
6. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導、ご協力をいたまわった。記して謝意を表す次第である。

小野正文・森原明廣（山梨県教育委員会学術文化財課）、田中大輔（若草町教育委員会）、米田明訓（山梨県埋蔵文化財センター）、神戸市立博物館、河野礼二、河野竜也

凡　　例

1. 遺構番号は原則として確認順である。
2. 遺構・遺物の挿図及び表の指示は下記の通りである。
 - 1) 遺構
 - ・実測図の水糸レベルは海拔高を示し、単位はmである。
 - ・規模は相対する壁の最長距離で求めている。
 - ・遺物番号は本文・挿図・表・写真図版で全て一致する。
 - 2) 遺物
 - ・土器観察表においてはAは法量、Bは遺存率、Cは調整、Dは胎土、Eは色調、Fは焼成を示す。さらにAの法量はIが口径、bが底径、hが器高を表し単位はcmで（）は推定値である。
 - また、色調説明は「標準土色帖（1992年度版）」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財團法人日本色彩研究所色票監修）に基づき記述した。

目 次

序 文 例 言・凡 例

第I章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
第II章 遺跡の概観	1
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第III章 発見された遺構と遺物	9
第1節 古墳時代の遺構と遺物	9
1) 壇穴状遺構	9
2) 遺構外出土土器	12
第2節 近世～近代の遺構	13
第IV章 ま と め	17
第1節 古墳時代の遺構と遺物	17
第2節 粘土採掘坑について	18
引用参考文献	
附章 楠形町前原G遺跡出土土器及び粘土の胎土分析	19
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)	4
第2図 遺跡一帯の古地図.....	5
第3図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第4図 全体図・トレンチ配置及びセクション図 (1/600、1/80)	7・8
第5図 1号竪穴状造構 (1/40)	9
第6図 1号竪穴状造構出土土器 (1/3)	10
第7図 2号竪穴状造構 (1/40)	10
第8図 2号竪穴状造構出土遺物 (1/3・2/3)	11
第9図 遺構外出土遺物 (1/3)	12
第10図 粘土採掘坑 (1/120)	13
第11図 試掘トレンチ配置及びセクション図 (1/2,000・1/160)	15・16

表 目 次

第1表 1号竪穴状造構出土土器観察表.....	10
第2表 2号竪穴状造構出土土器観察表(1).....	11
第3表 2号竪穴状造構出土土器観察表(2).....	12
第4表 遺構外出土遺物観察表.....	12

写真図版目次

巻頭図版 1 調査区より村前東A遺跡を望む（南東より）

巻頭図版 2 調査区より角力場第2遺跡を望む（北より）

図版 1 調査区全景

図版 2 (1) 1号竪穴状造構

(2) 2号竪穴状造構

図版 3 (1) 2号竪穴状造構遺物出土状況（全景）

(2) 2号竪穴状造構遺物出土状況（部分）

図版 4 (1) 粘土採掘坑（トレンチ2）

(2) トレンチ1断面

図版 5 (1) 粘土採掘坑

(2) 敵状遺構

図版 6 (1) 敵状遺構

(2) 敵状遺構（南より）

図版 7 出土遺物

図版 8 調査区作業風景

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

本遺跡は、中口摩郡柳町吉田字前原に所在する。柳町東縁部では日本道路公団が行う中部横断道の建設が行われている。柳町には若草・柳町インターチェンジの設置が予定されていることから、山梨県では甲西バイパスから若草・柳町インターチェンジへのアクセス道路を計画した。工事主体者である新環状・西関東道路建設事務所は路線予定地内での埋蔵文化財の有無および取り扱いを柳町教育委員会に問い合わせた。柳町教育委員会ではそれを受け現地踏査および遺跡台帳で確認を行い、当該地は周知の埋蔵文化財である前原G遺跡の周縁にあたっていることを確認し試掘調査を実施した。調査の結果、若干の遺物と竪穴状遺構と思われる遺構が検出されたため発掘調査が必要であると判断し、その旨を新環状・西関東道路建設事務所に回答した。柳町教育委員会では山梨県教育委員会学術文化財課の指導を受け新環状・西関東道路建設事務所と具体的な協議に入り平成10年度に発掘調査を行い、遺物整理および報告書作成は平成11年度に行うことで合意し協定を締結した。

第2節 調査の方法と経過

調査対象面積は2,800m²である。調査の方法は短期間で大きな面積を調査するということでコンピューターによる遺跡調査システムを採用した。現場の調査では使用しないが整理作業時に使用する為に調査区全体に10m方眼の仮想グリッド（北から南へA～G、西から東へ1～12）を組み、光波測量器・コンピューターを利用し遺物の取り上げ、遺構の図化を行った。また、遺物の出土状況の図化に関しては平板測量、簡易造り方実測を用い光波測量器と連携し迅速な調査を心がけた。

調査は平成11年2月1日に着手し、重機により40～50cmの厚さの耕作土を除去し築造地により確認精査し各遺構の調査を進めた。調査地は柳町より流入する大小河川によって形成された複合扇状地上にあるために礫質の土壤であり、土が重く遺構の確認に手間取った。また、調査中に個人住宅の建設に伴う発掘調査があり、この調査と同時に進行することとなった。このため発掘作業人員の確保や調査員のやり繩り等の問題があり、調査の進展に重大な影響を及ぼした。調査を行っていく中で古墳時代の竪穴状遺構と近世～近代の粘土採掘坑が確認された。前述したように調査には人的および時間的な余裕がなくなっていたことから古墳時代の遺構の調査をメインとし、近世～近代の遺構については残りのよい部分・重要だと思われる部分のみの調査しか行えなかった。

古地図について（第2図）

この古地図は寛政年間（約200年前）の本調査区一帯を描いている。地図上で黒く描かれている部分は原野で調査区の1部もここに掛かっている。この原野は土地の人の話だとクヌギや松が主体になっていたそうである。

（河野竜也氏所蔵）

第Ⅱ章 遺跡の概観

第1節 地理的環境

本遺跡が立地する梯形町は、甲府盆地の西部に位置し南アルプスの前衛山である梯形山の東麓に発達した町である。町域は地形的には東から梯形山を中心とする山地、梯形山東麓の落葉地塊によって形成された市之瀬台地、御動使川が作り出した日本有数の複合扇状地の3つに大きく区分される。

梯形山より流れ出る御手洗川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川当の諸河川は上流で18~20°という急激な勾配で梯形山を下り、大量の土砂を削って台地の出口の谷部に至ってそれを堆積させ御動使川の作り出す扇状地とあいまって複雑な複合扇状地を形成している。これら扇状地の扇尖部にあたる沢登・桃園・小笠原・下市之瀬・吉田などの地域は古くより「原方」と呼ばれており、特に山側の端部は「原七郷」と言われ「原七郷は月夜も焼ける」といわれる程に地下水位が深く水に乏しい乾燥地帯となっている。本遺跡はこの「原方」に位置し、御動使川扇状地扇端部に立地する。明治一大正時代にかけては総の生産が行われ、その後昭和30年代後半まで桑がつくれられ、灌漑施設の整った現在では果樹園として桃やスモモの生産が盛んな場所となっている。また、本遺跡より南側の扇状地端部では地下にしみこんだ水が湧き出す湧水点が存在し、若草町の鏡中条・十日市場・甲西町の江原・鮎沢等と弧状に連なる湧水列をなしている。この湧水列から低部は水が豊富なことから「田方」とよばれ文字通り水田が主体となる地域で、前述の「原方」と異なった地誌的様相を呈している。

第2節 歴史的環境

梯形町は釜無川の右岸、梯形山の山麓に発達した町で地形的に西から山地・台地・扇状地と大きく三分される。町内には現在約260の遺跡が確認されているが、そのほとんどが台地と扇状地に認められる。

市之瀬台地上では旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世の各時代に渡る遺跡が見られる。六科丘遺跡①・長田口遺跡②・長田A遺跡③では旧石器時代のナイフ形石器が発見されたことから、当該期の遺跡が台地上に存在すると予想され、從来、調査時にあまり注意が払われなかつたローム層中にも注意を払う必要があるだろう。六科丘遺跡・曾根遺跡④・大畠遺跡⑤で縄文時代早期・前期の遺物が発見されているが台地上において本格的に遺跡が増えるのは縄文時代中期からである。上の山遺跡⑥・長田口遺跡⑦・古屋敷遺跡⑧では当該期の遺物および遺構が発見されている。ただ、現在までの調査の所見では市之瀬台地は集落を営むには良好な台地であると考えられるが曾根丘陵や八ヶ岳南麓における縄文時代中期の遺跡のように大規模な集落は発達していない、むしろ鉄物師塙遺跡⑨や北原C遺跡⑩のように台地際の扇状地に中期の大きな集落が認められるようである。中期以降では長田口遺跡で後期初頭へ前葉にかけての配石遺構や晚期後半の浮線文土器が発見されている。

弥生時代には長田口遺跡や上の山遺跡で弥生時代中期の土器片が発見されているが台地上において本格的に生活が行われるのは後期になってからである。上の山遺跡・上ノ東遺跡⑪・六科丘遺跡・長田口遺跡では当該期の集落や方形周溝墓などが発見されている。特に長田口遺跡では長軸が11m以上もある大型住居址や東日本では4例目となるベンゲント状に2次加工された後漢鏡片が出土し、当該期における拠点的な集落といえるであろう。この台地上の集落は古墳時代の早いうちには廃絶され、台地上には前期~中期にかけての物見塚古墳⑫・六科丘古墳⑬・上ノ東古墳⑭・無名墳⑮などの古墳が甲府盆地を望むように台地を構成する丘陵の先端に築かれるようになる。古墳時代の集落は扇状地に展開されるようになり台地上には當まれなくなるが平安時代になると上の山遺跡において住居が発見されており、台地上の開発が再び行われるようである。中世になると上野氏・大井氏の椿城⑯・秋山氏の中野城など甲斐源氏ゆかりの氏族が擁ったとされる城郭が台地上に築かれる。また、上の山遺

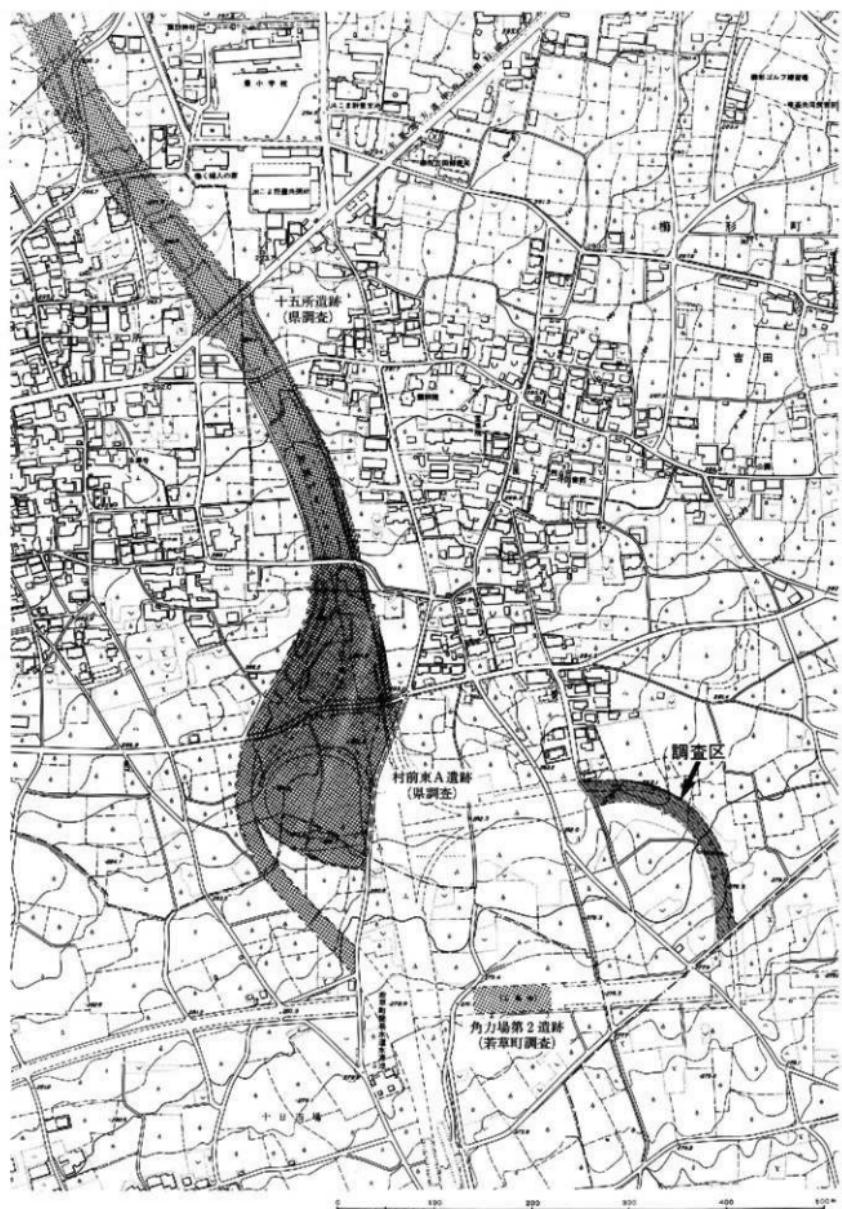
跡・長田口遺跡では中世の地下式土坑が調査されている。

さて、扇状地においては国指定の重要文化財の土偶が出土した鉢物師屋遺跡・メ木遺跡⑫・北原C遺跡のように台地際扇状地で縄文時代中期の集落が調査されており、從来縄文時代の遺跡が存在しないと考えられていた御動使川複合扇状地にて今後も縄文時代の遺跡が発見される可能性はあるといえるだろう。しかし、扇状地扇尖部から扇端部、さらに沖積低地における本格的な開発は弥生時代に入ってからであり、特に中部横断道・甲西バイパス建設に伴う発掘調査によって大規模に且つ從来調査の出来なかった深い面までも調査がなされ、扇状地に於ける遺跡の様相が少しずつ明らかになってきた。その結果、この扇状地の開発が進むのは弥生時代後期からだと言われてきたが、十五所遺跡⑬・二本柳遺跡⑭・油田遺跡⑮・大師東丹保遺跡⑯などでは弥生時代中期の遺物が発見され、また、向河原遺跡⑰では当該期の水田跡が調査されるなど、稲作の開始によって沖積地へと進出した遺跡が厚い扇状地堆積物に覆われて残されている事がわかってきた。弥生時代後期では住吉遺跡⑯・大師東丹保遺跡・十五所遺跡・村前東A遺跡⑯・枇杷B遺跡⑯などの遺跡が調査されている。特に十五所遺跡では方形周溝墓が數基発掘され、隣接する村前東A遺跡の墓所だと考えられている。

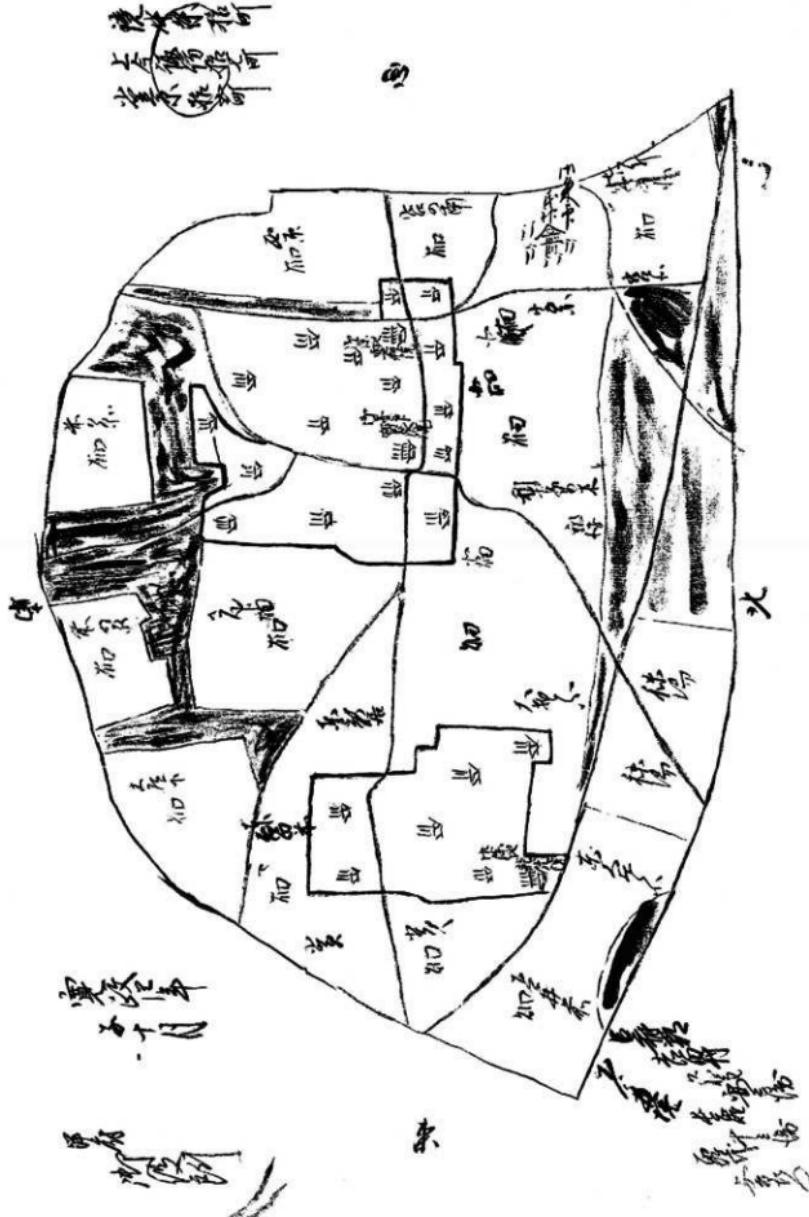
古墳時代では扇状地端部～沖積地にかけての開発はさらに進み、142軒の住居址が検出された村前東A遺跡・角力場第2遺跡⑯など前期の集落では東海系のS字口縁台付甕が多く出土し、古墳時代の社会的な変動期の様子が窺える。村内遺跡⑯では中期、新居道下遺跡⑯では後期の住居跡がそれぞれ調査されている。大師東丹保遺跡では氾濫による砂礫層下に埋没していた4世紀末～5世紀初頭の古墳が発見され、前期の古墳が台地先端の眺めのいい場所に占地する中でこの古墳は扇状地に立地しており、台地上の古墳との関係が注目される。また、上村古墳⑯・狐塚古墳⑯・鉢物師屋古墳⑯などに横穴式石室を持つ後期古墳は台地を下りきった扇状地の山腹の端部に築かれている。

律令体制化の本地域一帯は『和妙類聚抄』に所載される甲斐國・巨摩郡九郷の一つである「大井郷」に比定されており、奈良～平安時代の集落としては新居道下遺跡・村前東A遺跡・鉢物師屋遺跡・枇杷B遺跡・角力場第2遺跡・水田址が二本柳遺跡で調査され、当該期の様相がわかってきた。

中世にはいると甲斐源氏の一派が台頭して、小笠原氏の氏祖小笠原長清が挙ったとされる（伝）小笠原館跡⑯や加賀美遠光の挙ったとされる法善寺⑯など甲斐源氏の一派である各氏の居館跡が本地域にある。



第1図 道路周辺地形図 (1/5,000)



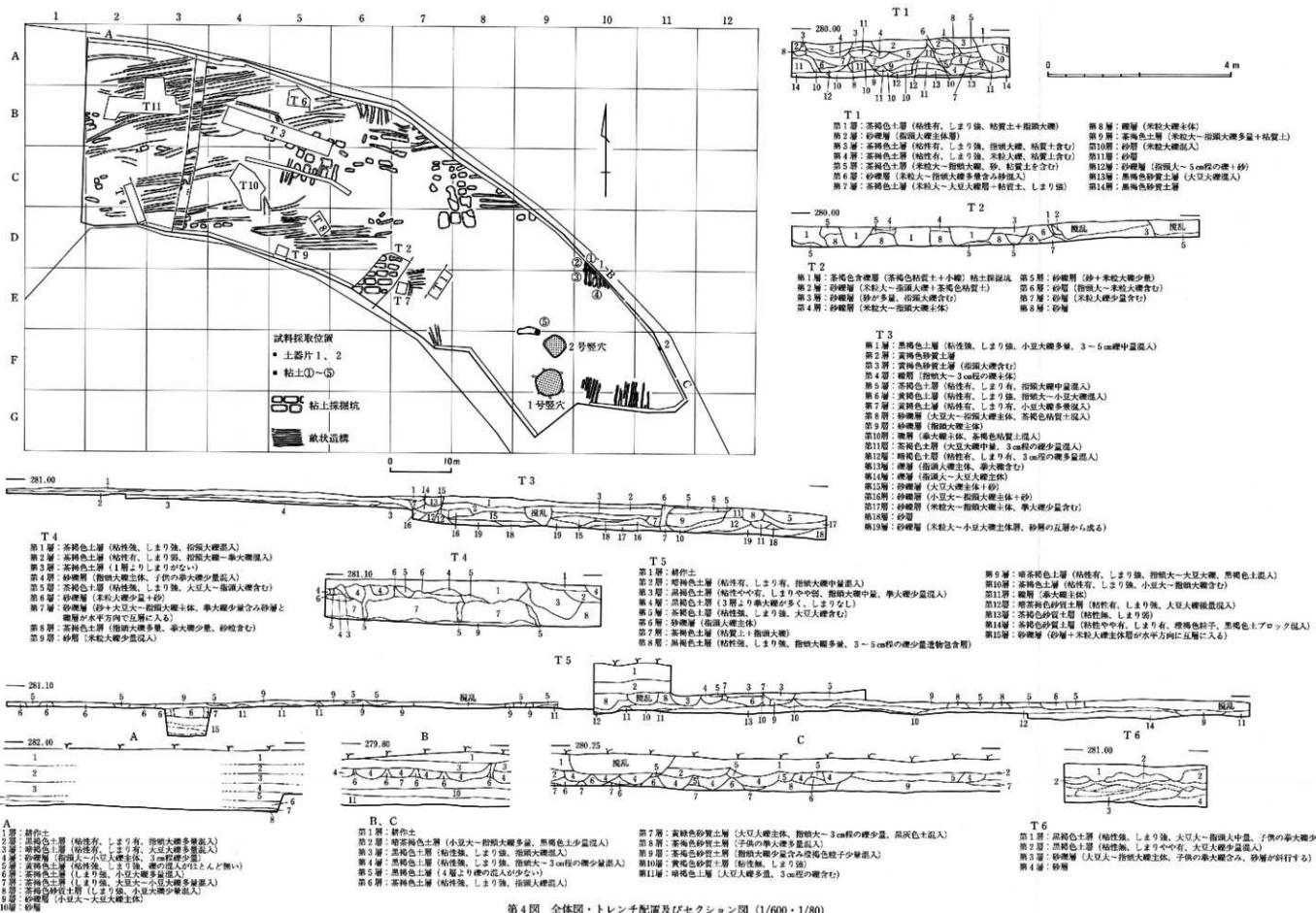
第2図 遺跡一帯の古地図



A. 前原G

1. 北原C
2. 北原A
3. 北新宿C
4. 丸山A
5. 須崎古墳
6. 伝説鶴原B
7. 伝説鶴原C
8. 香根
9. 西原
10. 鮎名塚
11. 永面B
12. 宮原
13. 番作A
14. 志面C
15. 吉田西原A
16. 八田畠A
17. 十五所
18. 村前東A
19. 角力場第2
20. 魔鬼B
21. 東原B
22. 長田A
23. 長田口(馬)
24. 新野田A
25. 長田口(町)
26. 六科丘古墳
27. 六科丘
28. 新野田B
29. (65) 小笠原氏庭
30. コウモリ塚古墳
31. 上の山
32. 大畠
33. 佛崎
34. 上ノ東
35. 上ノ東古墳
36. 物貯藏古墳
37. 古屋敷
38. 東久保A
39. 孤塚古墳
40. 銀物御屋古墳
41. 銀物御屋
42. メ木
43. 上村古墳
44. 新居道下
45. 二木塚
46. 向河原
47. 油田
48. 中川田
49. 村内
50. 佐吉
51. 西川
52. 大野東丹保
53. 法善寺

第3図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図(1/25,000)



第4図 全体図・トレンチ配置及びセクション図 (1/600 · 1/80)

第III章 発見された遺構と遺物

第1節 古墳時代の遺構と遺物

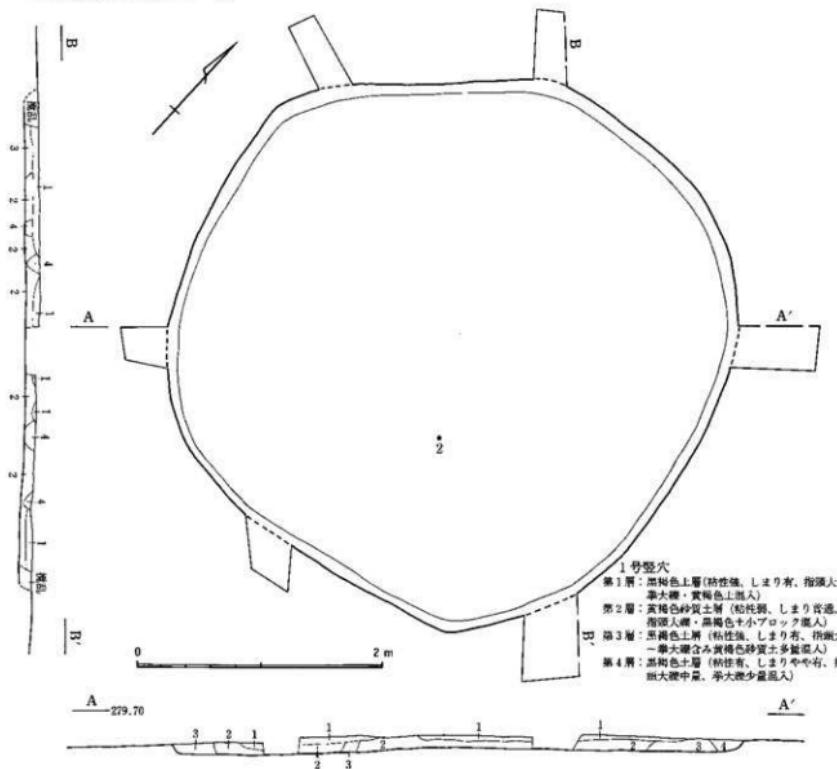
1) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（第5・6図、第1表、図版2）

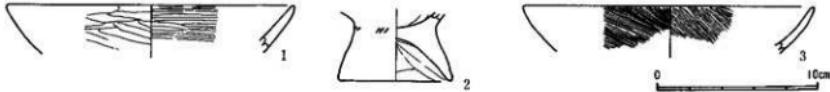
F-9区に位置し、北側に2m離れて2号竪穴状遺構がある。上部に削平を受け、また部分的に擾乱を受けていることから遺存状態はあまりよくない。平面形態は円形を呈し、規模は長軸が4.5m、短軸4.3m、壁高は6~10cmを測る。確認当初は住居址として調査をおこなったが、柱穴が確認出来ないこと、炉が存在しないことなどの理由から竪穴状遺構として取り扱うこととした。

底面はほぼ平坦で堅緻である。覆土は4層に分けられ、ほぼ自然な堆積状況を示していた。

出土遺物は全面に分布していたが細片が多く、図示できるものがきわめて少ない。覆土上層から古墳時代前期の土器を何点か確認している。



第5図 1号竪穴状遺構 (1/40)



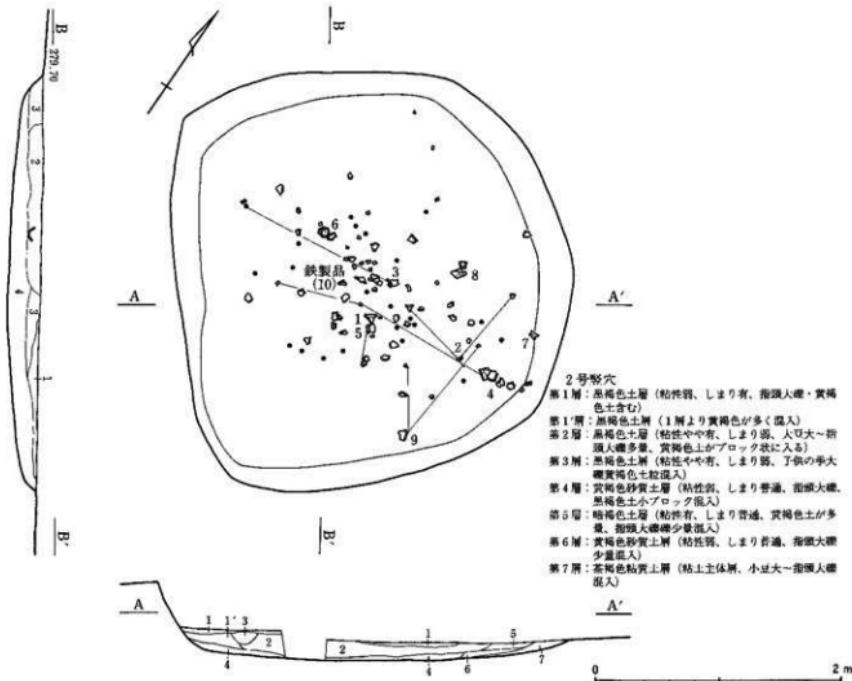
第6図 1号竖穴状遺構出土土器 (1/3)

第1表 1号竖穴状遺構出土遺物観察表

1	甕	A : I (17.6)、h (3.0)。B : 口縁部破片。C : 外面一丁寧なヨコヘラミガキ。内面一ヨコハケ。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。
2	台付甕	A : b6.7、h (4.3)。B : 脚部1/2。C : 外面一ヨコナデ。内面一胴部、脚部ともナナメ方向のヘラナデ。D : 白石・雲母多量に含む。E : 良。F : 外面くすんだ橙色 (2.5YR6/6)、内面橙色 (5YR7/6)。
3	高環	A : I (17.8)、h (2.9)。B : 口縁部破片。C : 外外面ともに細かなヘラミガキ (単位を持つ)。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : 外面におい赤褐色 (5YR4/3)、内面橙色 (5YR6/6)。

2号竖穴状遺構 (第7・8図、第2・3表、図版2・3)

F-9区に位置し、南側に2m離れて1号竖穴状遺構がある。上部に大きく削平を受け、また部分的に擾乱を受けていることから遺存状態はあまりよくない。平面形態は不整円形を呈し、規模は長軸が3.7m、短軸3.2m、壁高は6~40cmを測る。確認当初は住居址として調査をおこなったが、柱穴が確認できること、炉が存在しないことなどの理由から竖穴状遺構として取り扱うこととした。



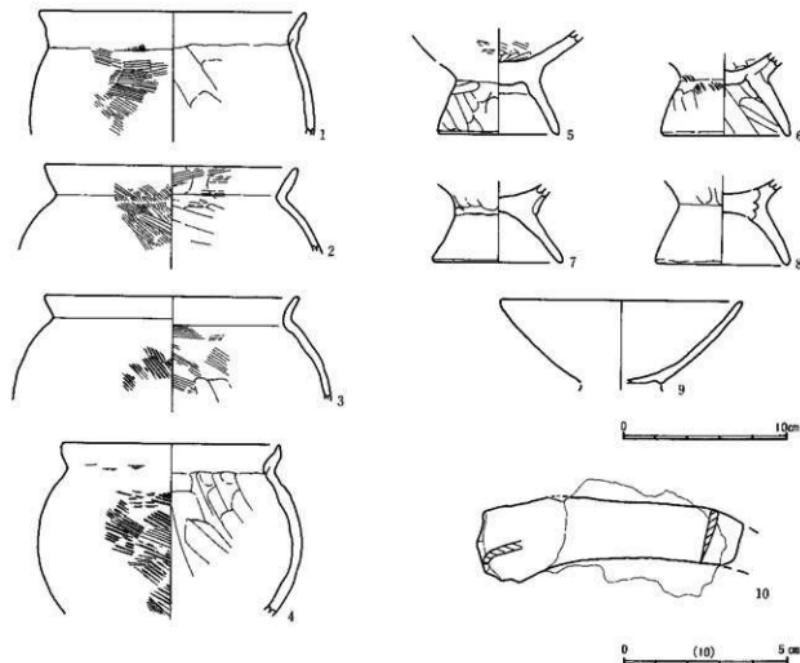
第7図 2号竖穴状遺構 (1/40)

底面は若干の擦鉢状で、中央部が低くなっている。覆土は7層に分けられる。

出土遺物は非常に多く、造構の全域において底面直上から覆土上層に至るまで土器片が検出された。細片が多く、同一個体の破片が広範囲に散乱していること、上層の遺物と下層の遺物において時期差がほとんど認められないことから、短期間に土器を投げ込み、人为的に埋め戻した可能性が高い。

また住居址ほぼ中央部、床面直上から鐵製鎌Na10が出土している。刃弦長が現存で8.2cm、刃幅2.1~1.6cmと小ぶりなもので、刃は内湾して曲がる曲刃である。断面は楔形の両刃と思われる。身の基端はわずかに折り曲げられている。

時期は出土土器より古墳時代前期と考えられる。



第8図 2号竖穴状造構出土遺物 (1/3・2/3)

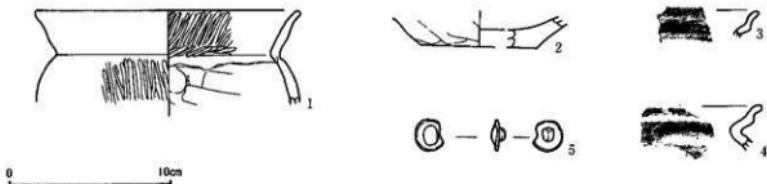
第2表 2号竖穴状造構出土遺物観察表(1)

1	甕	A : I (16.2)、h (7.7)。B : 口縁部～胴部上半破片。C : 外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のハケ残る。内面一口縁部摩滅により調整不明。胴部ナナメ方向のヘラナデ。D : 微白石粒・赤色粒含む。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。
2	甕	A : I (15.4)、h (5.3)。B : 口縁部～胴部破片。C : 外面一口縁部ナナメハケのちヨコナデ。頭部～胴部ナナメハケ。内面一口縁部指押えのちヨコハケ。その後部分的にヨコナデ。胴部ナナメ方向のヘラナデ。D : 密。E : 良。F : 外面によい赤褐色 (2.5YR5/4)、内面明赤褐色 (2.5YR5/6)。
3	甕	A : I (15.4)、h (6.5)。B : 口縁部～胴部破片。C : 外面一口縁部ヨコナデ。胴部ナナメハケ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上半指押えのちナナメハケ。以下ナナメハケのちヘラナデ入る。D : 密。E : 良。F : 外面淡黒褐色 (7.5YR1/3)、内面橙色 (7.5YR6/6)。

第3表 2号堅穴式構出土遺物観察表(2)

4	壺	A : l (13.2)、h (10.6)。B : 口縁部～胴部1/4。C : 外面一口縁部ヨコナデ。頸部～肩部ヨコハケのちヨコナデ。胴部ナナメハケ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部指揮えのちナナメ方向のヘラナデ。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : 外面黄褐色 (2.5YR4/1)、内面橙色 (5YR6/6)。
5	台付甕	A : b7.3、h (6.5)。B : 脚部4/5。C : 外面一脚部摩滅しているがヘラナデの痕跡あり。胴部下半部分的にヨコハケ残る。内面一脚部摩滅していく調整不明。接合部付近にナデ。胴部下半ハケのち部分的にナデ。接合部付近には時計回りのナデ。D : 微白石粒を多量に含む。E : 良。F : 外面黄褐色 (10YR7/4)、内面にぶい橙色 (7.5YR6/4)。
6	台付甕	A : b7.8、h (5.1)。B : 脚部完形。C : 外面一脚部下半ヨコナデ。接合部付近にナナメハケのちヘラナデが入る。内面一脚部ナナメ方向のヘラナデのちヨコナデ。胴部下半織維束状工具によるナデ。D : 密。E : 良。F : 暗橙色 (5YR6/6)。
7	台付甕	A : b7.8、h (4.9)。B : 脚部4/5。C : 外面一脚部摩滅していく調整不明。接合部付近にタテハケのちタテ方向のヘラナデ。内面一摩滅著しく調整不明。D : 白石粒・赤色粒多量に含む。E : 良。F : 外面くすんだ橙色 (5YR6/8)、内面橙色 (5YR6/8)。
8	台付甕	A : b (8.0)、h (5.3)。B : 脚部2/5。C : 外面接合部付近にヘラナデ残る。内面一摩滅著しく調整不明。D : 微細白石粒・赤色粒含む。E : 良。F : にぶい橙色 (7.5YR6/4)。
9	高環	A : l (14.8)、h (5.0)。B : 口縁部部片。C : 内外面ともに摩滅著しく調整不明。D : 微細白石粒・赤色粒含む。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。

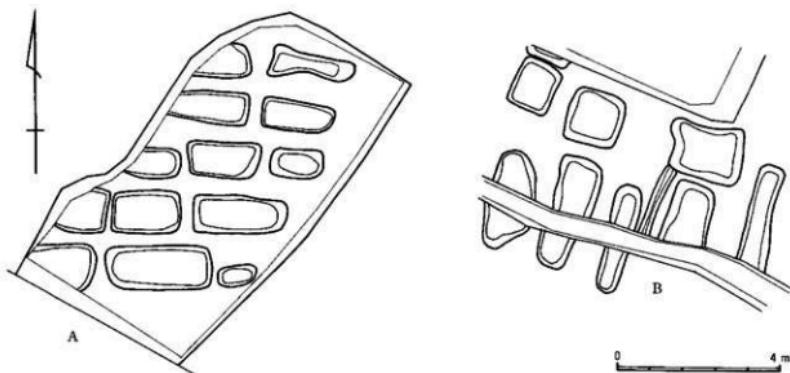
2) 遺構外出土遺物 (第9図、第4表、図版7)



第9図 遺構外出土土器 (1/3)

第4表 遺構外出土遺物観察表

1	壺	A : l (16.2)、h (5.8)。B : 口縁部～胴部破片。C : 外面一口縁部ヨコナデ。胴部タテヘラミガキ。内面一口縁部ナナメヘラミガキ。胴部指揮えのちヨコヘラナデ。D : 密。E : 良。F : 明赤褐色 (5YR5/8)。
2	壺	A : b (7.0)、h (2.1)。B : 底部破片。C : 外面一ナナメ方向のヘラナデ。内面一摩滅しているがヘラナデと思われる。D : 混雜物多量に含む。E : 良。F : 外面橙色 (2.5YR6/8)、内面暗赤灰色 (2.5YR3/1)。
3	S字甕	B : 口縁部破片。C : 内外面一ヨコナデ。D : 金雲母多量に含む。E : 良。F : にぶい褐色 (7.5YR5/4)。
4	S字甕	B : 口縁部破片。C : 外面一口縁部ヨコナデ。肩部ナナメハケのちヨコハケ。内面一口縁部ヨコナデ。肩部ヨコハケ。D : 黒色粒子多量に含む。E : 良。F : 外面橙色 (7.5YR6/6)、内面にぶい黄褐色 (10YR6/4)。
5	土製品	A : 直径1.9×1.9、厚さ0.9。B : 完形。C : 内外面一ナデ。D : 非常に密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。



第10図 粘土採掘坑 (1/120)

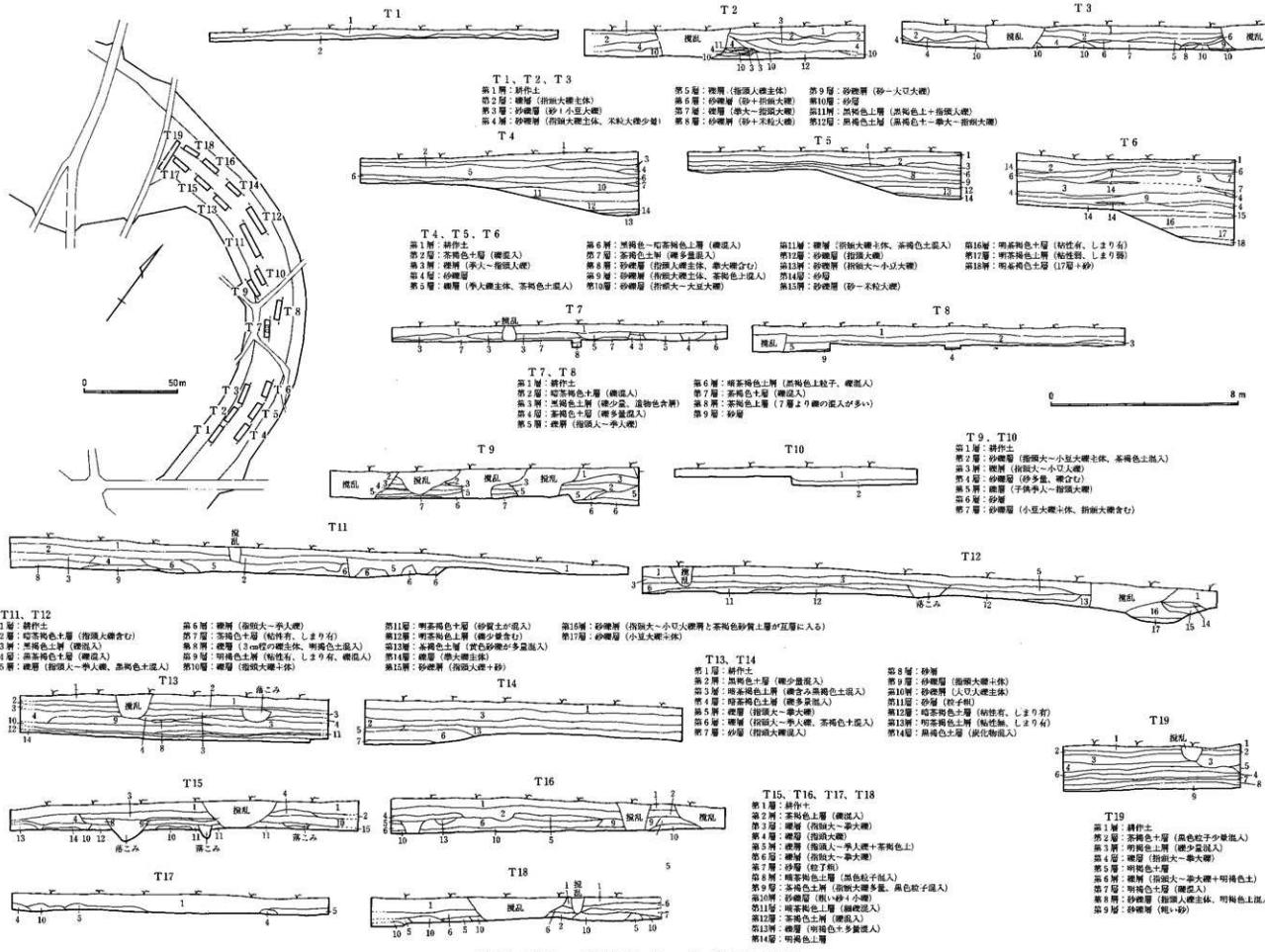
第2節 近世～近代の遺構

1) 歓状遺構

本調査区の北半分のはば全面と南側の一部において検出された。歓の規模については平均で幅20cm、高さ20cm、歓の間隔が60cmを測る。歓は等間隔ではば平行な配列であり、調査区北半分については主に東西方向、南側においては南北方向に直線的に延びる。断面からの観察によると歓状遺構が粘土採掘坑を切っている。

2) 粘土採掘坑

調査区の西側において検出された。形状は長方形を呈し、長軸が90～240cm、短軸が50～110cm、深さ40～50cmを測る。各採掘坑は幅が30～50cmある歓によって区別されており、数個～数十個の採掘坑が単位となって群をなしている（粘土採掘坑群A・B）ものや、まとまりが認められなく単独で存在するものがある。粘土採掘坑群Aは長軸がほぼ東西方向、粘土採掘坑群Bは長軸が約20°東に傾いている他、多くの採掘坑がほぼ東西方向に長軸をもつ。採掘坑の断面形は方形を呈し、底面は平らである。壁はほぼ垂直で直線的に上がるものと、緩やかなカーブを描き急角度で立ち上がるものとがある。覆土は主に指頭大程の礫が多く含まれる砂礫層と礫層が水平に互層になっているものや茶褐色土層と礫層が互層になっているものが見られるが、この覆土の堆積が自然流入によるものなのか人為的な埋め戻しによるものなのかは不明である。これらの粘土採掘坑は砂層中に掘り込まれており、調査区の上層部に認められる粘質土（粘土）を掘り込み、砂層に到達したために採掘を止めたものだと考えられる。



第IV章 まとめ

第1節 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では古墳時代の遺構として、竪穴状遺構を2軒確認することができた。いずれも検出当初は住居址として調査をおこなったが、炉および柱穴が確認されず竪穴状遺構として取り扱うことになった。調査区域内には同時代の土器が分布する場所が何箇所かあったが、歟状遺構による搅乱を受けており、遺構の検出には至らなかった。

今回確認された土器は古墳時代前期に位置付けられるものである。1号竪穴状遺構から出土した甕の口縁外面にはヘラミガキが施されており、また高環の坏部も単位を持つ非常に細かなミガキが施されていた。2号竪穴状遺構から出土した甕はいずれも單純口縁で胴部中位に最大径を持つものである。口縁は「く」の字に短く立ち上がり、若干受け口状になるものもあり、独特の形態をなしている。いずれも編年をおこなう際のメルクマークとなるS字状口縁台甕（以下S字）を伴っていないことから時期決定が困難であるが、高環および甕の形態等から小林健二氏による編年のIII期に該当するものと考えられる。また遺構外から出土したS字も、口縁形態からIII期に該当すると考えられる。

2号竪穴状遺構から出土した鉄製の鎌は、刃弦長が現存で8.2cm、刃幅2.1~1.6cmと小ぶりなもので、刃は内湾して曲がる曲刃である。寺沢薰氏は「収穫と貯蔵」の中で、民具例などをもとに鎌の機能により刃弦長と刃幅が異なることに着目し、分類をおこなっている。今回出土した鎌は大きさから穂などの穂首収穫用の「穂切り鎌」に該当すると考えられる。

本遺跡の南側に位置する角力場第2遺跡もからもほぼ同時期の住居址が報告されているが、村前東A遺跡に比べて住居址の数は極端に少なく、調査区東側より2軒の住居址が報告されている。さらに今回確認された竪穴状遺構と同様な遺構が検出されており、土器の出土状況も遺構が埋没する過程で投げ込んだ可能性が高く、今回確認された2号竪穴状遺構の状況に類似する。角力場第2遺跡では竪穴状遺構が住居址に近接して存在しており、本遺跡でも住居址の存在の可能性があることから、角力場第2遺跡同様に住居址とセットで機能する性格が考えられるが、今後資料の増加を待って、再度検討が必要であろう。

また、本遺跡の性格を位置付けるには、西側に位置する十五所遺跡、村前東A遺跡を中心とする大規模な当該期の集落との関係を明らかにする必要があるが、今後一帯の調査が進むことにより徐々に明らかとなっていくであろう。

引用・参考文献

- 小林健二 1993 「外来系から在来系へ」『研究紀要9』山梨県考古学博物館ほか
小林健二 1993 「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
小林健二 1995 「山梨県出土の北陸系土器」『山梨県考古学論集IV』山梨県考古学協会
小林健二 1998 「甲斐における古式土師器の成立」『專修考古学』第7号
田中大輔 1998 「角力場第2遺跡」若草町教育委員会
寺沢 薫 1991 「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究 4 生産と流通I』雄山閣
三田村美彦 1997 「村前東A遺跡概報4」山梨県教育委員会

第2節 粘土採掘坑について

本遺跡においては検出された粘土採掘坑は若草町において生産がかつて盛んであった瓦の原料である粘土を採掘したものである。このような遺構は、近年大規模開発が沖積地に及ぶにあたり若草町から櫛形町にかけて発見されるようになった。近年、近世～近代にかけての遺跡調査の重要性が指摘される中で、これらの発見は地域の近代産業を明らかにする上で意義のあるものといえる。

若草町に於ける瓦生産の歴史は享保元年（1716）に開始されたと伝えられている。生産開始当初は農家が農業の合間に瓦焼きを行う程度の継々としたものであったが、甲府城に瓦が納められ、さらに明治に入り、日本で近代産業が盛んになるに従って瓦の需要が拡大し必然的に生産量も多くなってきた。その生産のピークは大正から昭和の初期にかけての時期で山梨県内産の瓦の約半分を生産していた。しかし、交通機関の発達により瓦の一大生産地である三州からの製品が流通してきたことや、原料である粘土が取りつくしのため不足を来たしてきたこともあり、家内工業的に小規模に生産していた各業者は廃業や転業を余儀なくされ、現在では「村おこし事業」として瓦が作られるにすぎなくなっている。（若草町史 1990）

本遺跡での粘土採掘坑は採掘坑ごとにある程度のまとまりが見られ、これらの長軸方向が同じで、ある程度のまとまりがある粘土採掘坑が1回における粘土採掘を示すものであろう。しかし、全体的には採掘坑群の長軸方向にまとまりがなく計画的・組織的な採掘は行われていなかったようである。200年に近い瓦生産の歴史の中でこれらの粘土採掘坑が掘られた正確な時期は、遺物が全く出土していないことから不明であるが、土地の古考の話によると粘土の採掘が瓦の生産地である若草町加賀美周辺で行われていたものが生産が拡大するにつれて次第に櫛形町吉田・桃園と北進していく最終的には八田村下八田まで粘土の採掘が行われたことや、近隣の新居田遺跡では粘土採掘坑の坑底から大正から昭和初期にかけてのものと考えられる鐵簾が出土していることなどから本遺跡での粘土採掘坑が掘られた時期も瓦生産のピークを迎える大正から昭和初期にかけての可能性が高い。

引用・参考文献

- 上原真人 1997 「瓦を読む 歴史発掘①」講談社
河西 学 1997 「甲府城と加賀美瓦」「山梨考古学論集Ⅲ」山梨県考古学協会
清水 博 1995 「柿平B遺跡」櫛形町教育委員会
末木 健 1994 「山梨県に於ける近世瓦窯について」「山梨考古学論集Ⅲ」山梨県考古学協会
三田村美彦他 1999 「村前東A遺跡」山梨県教育委員会
米田明訓 1998 「新居道下遺跡」山梨県教育委員会
若草町 1990 「若草町史」

附章 楯形町前原G遺跡出土土器および粘土の胎土分析

川鉄テクノリサーチ株式会社

分析・評価センター

埋蔵文化財調査研究室

岡原 正明

伊藤 俊治

1. はじめに

山梨県楢形町教育委員会が発掘調査し、楢形町前原G遺跡から出土した土器片および粘土について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む胎土分析の依頼があった。

調査の観点は、これら遺跡より出土した粘土製品が在地の粘土を原料として生産されたものか、外部から移入されたものかを明らかにすることにある。

2. 調査項目および試験・検査方法と結果

(1) 外観の観察と写真撮影

試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位であるスケールを同時に写し込みで撮影した。外観の観察結果を一覧表に纏め20頁に、外観写真を23頁に示した。

(2) 重量計測

計重は電子天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入した。重量は次頁の表1に併記した。

(3) 蛍光X線分析法による化学成分分析

測定は堀場製作所製蛍光X線元素分析装置(MESA-500)を用いた。この装置は測定室が径150mm、高さ70mmあるため、今回の試料はそのまま測定部に収納可能であった。それぞれの分析値を抜き出し20頁の表2に示した。また、比較のための基準試料に国土地理院地質調査所の標準鉱物試料(JG-la)を用いた。

3. 調査および考察結果

3-1. 分析値の比較

表2の蛍光X線分光分析法による値を比較してみると、試料No.1ツボおよび試料No.2S字状口縁土器(以下土器という)の出土地点の2~3m近傍と15m程離れた地点の粘土との間にはシリカ(SiO₂)やアルミナ(Al₂O₃)を除く分析値に差が認められ、ツボや土器は近傍の粘土を用いて製作されたものではないと推定される。引き続き精度を高め検討を進める。

3-2. 胎土と在地粘土の検討

前原G遺跡より出土したツボや土器片が在地の粘土を原料として生産されたものか、外部から移入されたものかを考察する。

標準鉱物試料(国土地理院地質研究所-JG-la)を基準に胎土中の微量元素としてカリウム(19-K)とカルシウム(20-Ca)、ルビジウム(37-Rb)とストロンチウム(38-Sr)等の含有比を考慮する三辻利一¹¹の方法を応用し進めることとした。

表1 試料の肉眼観察概要

試料No	名 称	重 量 g	観 察 記 錄
1	ツ ボ	39.1	長さ70mm×幅30mm×厚み6mmの土器片に口縁張出部32mmが付いた小片試料である。内外面ともに赤く焼成され外面下部には煤が付着し黒くなっている。きめ細かな土を使用している。
2	S字状口縁土器	13.3	長さ45mm×幅25mm×厚み6mmのS字状口縁部の付いた土器片である。土は黄土色で珪砂の細粒を含んだ粘土が使用されている。口縁部は薄く仕上げられており焦げ茶色になっている。
3	粘 土 ①	28.5	試料No 2 の近傍2~3m内から採取した粘土である。①~④の粘土の採取場所によって色調に差が認められる。①、③と④はほぼ同系の褐色である。砂礫が約40%近く混入している。
4	粘 土 ②	26.4	試料No 2 の近傍2~3m内から採取した粘土である。他試料に比べて黒褐色をしている。砂礫が多く、その量は50%以上である。
5	粘 土 ③	32.2	試料No 2 の近傍2~3m内から採取した粘土である。径0.2~3mmの比較的細かな砂礫の混入がある。重量比で30%位である。
6	粘 土 ④	33.8	試料No 2 の近傍2~3m内から採取した粘土である。砂礫が多くその量は50%以上であった。
7	粘 土 ⑤	34.3	No 2 試料出土地点より12m離れた地点で採取された粘土で、明るい黄土色を呈する。礫の混入が多く0.5~7mmの砂礫が25.2kg粘土は6.9kgで80%を砂礫が占めていた。
8	標準試料	JG-1a	工業技術院地質調査所提供的標準試料で化学成分量が公認されている。データとの比較を行い指標元素：Sr、Rb、Ca、Kなどの存在比率を探る。

註：粘土試料には多量の砂礫の混入が認められたので、本来は試料をそのまま分析に供するのであるが、目視と筛い分けによって砂礫を除いて分析試料とした。

表2 梅形町〔前原G遺跡〕分析試験結果（土器片・粘土） (蛍光X線分光分析法) %

資料No	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Fe ₂ O ₃	MnO	TiO ₂	Na ₂ O	K ₂ O	SrO	Rb ₂ O	ZrO ₂
1	64.0	22.6	2.18	0.99	7.67	0.054	1.02	0.051	1.44	0.022	0.009	0.022
2	68.3	22.3	0.58	1.11	2.91	0.009	0.994	3.06	0.739	0.005	0.004	0.017
3	69.6	15.2	0.99	2.88	7.46	0.141	0.899	0.081	2.70	0.017	0.016	0.034
4	69.4	15.6	1.16	2.75	7.46	0.142	0.886	0.015	2.55	0.018	0.018	0.032
5	68.9	16.4	1.16	1.34	8.39	0.158	0.918	0	2.66	0.021	0.020	0.044
6	71.0	15.1	1.39	0.69	8.19	0.175	0.901	0	2.54	0.025	0.022	0.035
7	67.4	15.9	1.46	2.17	9.00	0.215	0.952	0	0.79	0.023	0.017	0.034
JGla	76.8	13.4	2.10	0.92	1.86	0.058	0.254	0.815	3.73	0.021	0.021	0.014

まず、珪素(14-Si)の強度(cps/ μ A)を基準としカリウム、カルシウム、ルビジウムおよびストロンチウム元素の強度比を計算で求め(数値上段)、この値と標準鉱物試料で想定された強度とを比較し粘土中の元素存在比(下段)を求める。その結果を表3に示す。

表3 船上中の標準試料に対する元素存在比

試料No	K	Ca	Rb	Sr	K/Ca	Rb/Sr
1	0.180 0.534	0.307 1.48	0.112 0.455	0.284 1.07	0.361	0.425
2	0.0848 0.251	0.0768 0.371	0.0571 0.232	0.0866 0.327	0.677	0.709
3	0.291 0.774	0.119 0.575	0.173 0.703	0.201 0.758	1.35	0.927
4	0.278 0.825	0.141 0.681	0.198 0.805	0.211 0.796	1.21	1.01
5	0.291 0.864	0.141 0.681	0.217 0.882	0.232 0.875	1.27	1.01
6	0.266 0.789	0.162 0.783	0.255 1.04	0.266 1.00	1.01	1.04
7	0.315 0.935	0.183 0.884	0.185 0.752	0.252 0.951	1.06	0.791
8 : JG-1a	0.337	0.207	0.246	0.265	—	—

引き続き、表3の元素含有比K/Caを縦軸、Rb/Srを横軸にして図1を作成した。

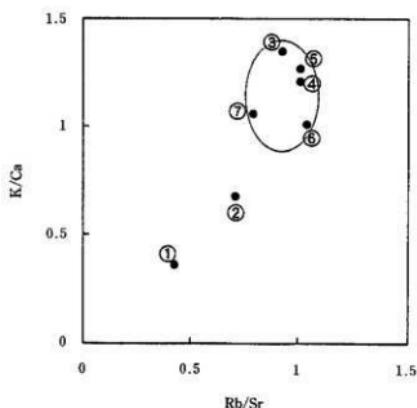


図1. 横形町前原G遺跡出土のツボおよびS字状口縁土器と出土地点近傍の粘土の成分分布

図1から次のようなことが考察できる。

- (1) 粘土③～⑦の分布は、採取した過程から当然のことであるが一群となっている。
- (2) この中で、⑦が試料採取地点は他の粘土がツボや土器の出土地点とは異なり約15m離れていることが原因してか、集団とやや離れている。
- (3) したがって、ツボ①と土器②とは胎土成分が異なる粘土から作成されたものと推定できる。
- (4) また、ツボ①と土器②との胎土成分の分布が異なるので、それぞれ別の粘土から作成された可能性が高い。なお、前述の(3)を含めこの問題について次の項で再度検討する。

3-3. ツボおよびS字形状口縁土器の他産地との比較

ツボおよび土器が他産地から移入された可能性について検討する。

引き続き、これらの値を基にK/CaとRb/Srの元素比をプロットし図2に示した。

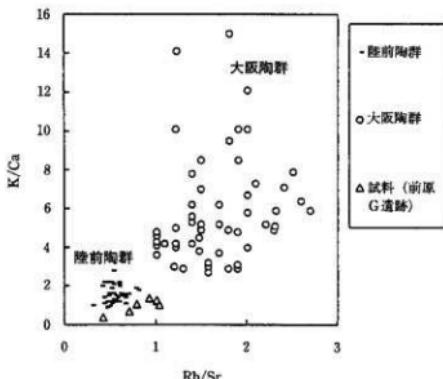


図2. 楢形町前原G遺跡出土品と近傍の粘土の化学成分分布位置
(須恵器産地との比較)

図2から次のようなことが考察できる。

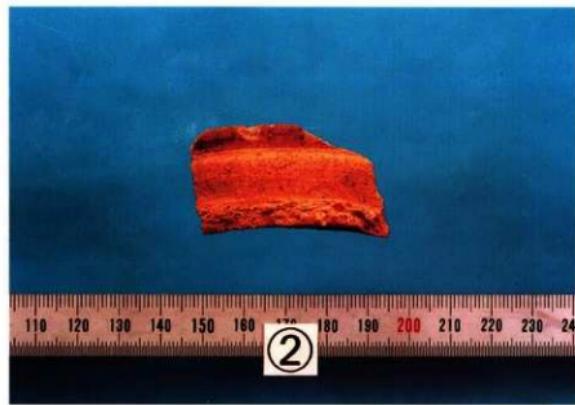
- (1) 楢形町前原G遺跡出土のツボと土器および粘土の化学成分分布位置は、たとえば大阪陶群のように分散することなく、陸前陶群と同様に比較的狭い範囲に纏まって分布している。
- (2) したがって、ツボと土器は比較的近隣に位置した窯によって焼成された可能性が高い。しかし、試料①のツボの分布位置が他のものと乖離しているのでその生産地については楢形町前原G遺跡近傍以外の可能性もあり、今後の調査に待ちたい。
- (3) 楢形町前原G遺跡近傍の粘土やツボおよび土器の胎土成分は大阪陶群や陸前陶群とは異なり在地特有の成分ではないかと考えられる。

参考文献

- 1) 三辻利一他：『須恵器のケイ光X線分析』；X線分析の進歩[10]61～65 (1979)



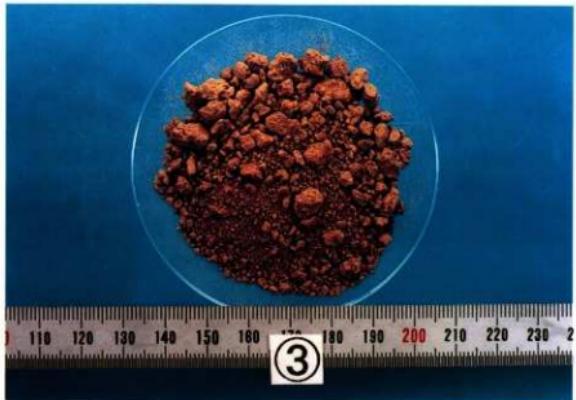
試料NO. 1
ツボ片



試料NO. 2
S字状口縁土器片



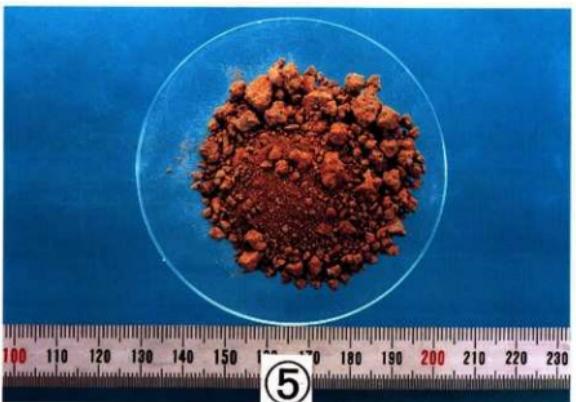
同 断面



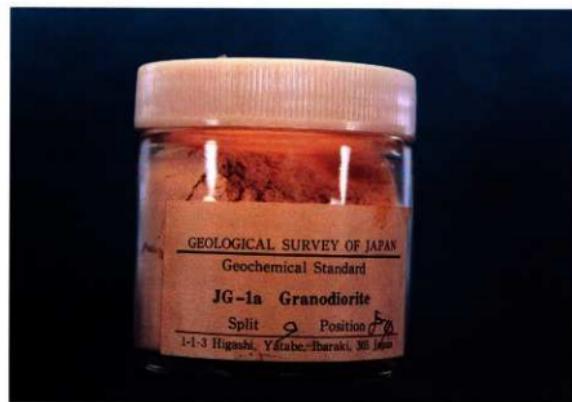
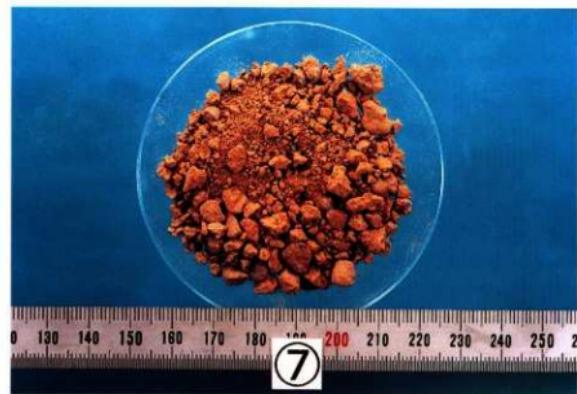
試料NO. 3
粘土①



試料NO. 4
粘土②

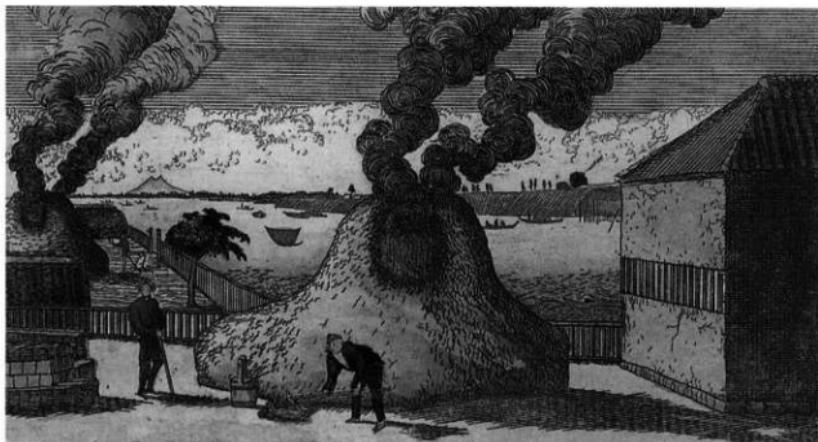


試料NO. 5
粘土③



対応試料NO. 8
標準試料JG-1a

写真図版



今戸瓦焼之図 画歐堂田善（文化年間（1804～18）特戸市立博物館所蔵）

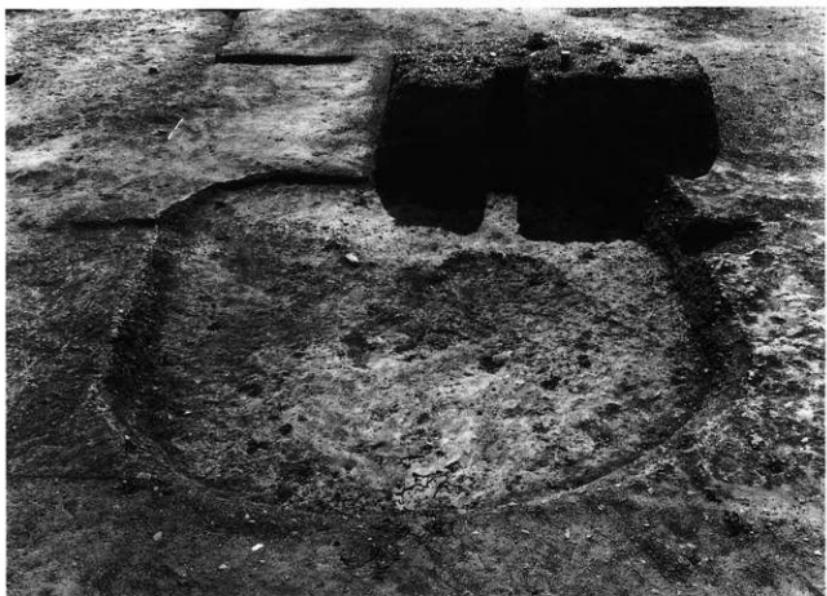


調査区全景

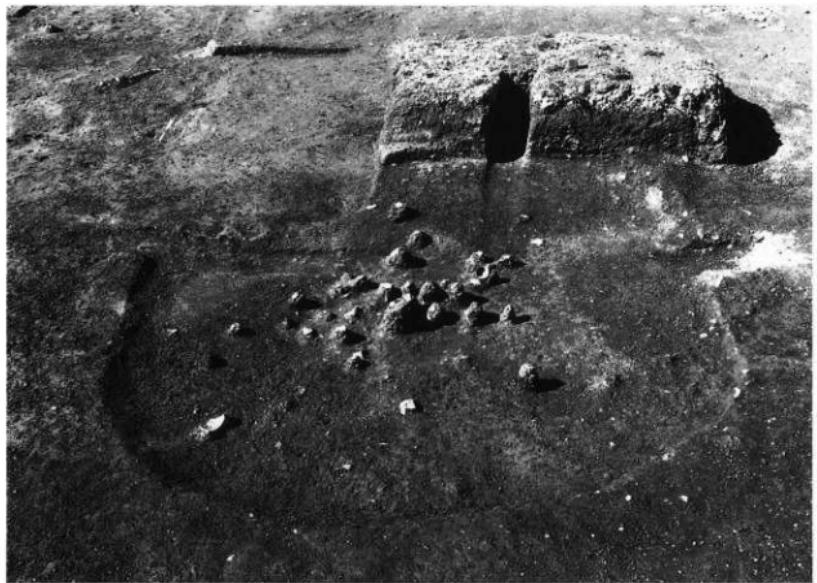
图版 2



(1) 1号竖穴状遗構



(2) 2号竖穴状遗構



(1) 2号竖穴状遗构遗物出土状况（全景）



(2) 2号竖穴状遗构遗物出土状况（部分）



(1) 粘土採掘坑（トレンチ 2）



(2) トレンチ 1 断面



(1) 粘土採掘坑



(2) 鉢状遺構



(1) 畝状遺構



(2) 同 南より



2号出土 (1、2、3)



2号出土 (4)



2号出土 (9)



2号出土 (5)



2号出土 (6)



2号出土 (7)



2号出土鉄製品



1号出土 (2)



遺構外出土 (1、3、4)



遺構外出土 (2)

出土遺物



調査区作業風景

前原G遺跡報告書抄録

フ リ ガ ナ	マエハラ G イセキ
書 名	前原G遺跡
副 題	新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書
シリ一ズ	櫛形町文化財調査報告書 No19
編 著 者 名	山下大輔、若林初美、小口妙子
発 行 者	櫛形町教育委員会 山梨県新環状・西関東道路建設事務所
編 集 機 関	櫛形町教育委員会
住 所・電 話 番 号	山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1 Tel (055) -282-0108
印 刷 所	鬼灯書籍株式会社 長野市櫛原2133-5 Tel (026) 244-0235
発 行 日	2000年2月28日
遺 跡 所 在 地	山梨県中巨摩郡櫛形町吉田字前原577-1他
1/25000地図名・位置	小笠原・北緯35°36'45" 東経138°29'11"
主 要 な 時 代	古墳時代 近世～近代
主 な 遺 構	竪穴状遺構（古墳）、畝状遺構（時期不明）粘土採掘坑（近世～近代）
主 な 遺 物	土師器・土製品・鉄製品
調 査 期 間	1999年2月1日～3月31日
コ 一 ド	市町村 193909 遺跡 34
調 査 面 積	2800m ²
調 査 原 因	新山梨環状道路建設に伴う発掘調査

表紙の絵について

表紙の絵は達磨窯といって近世に発達した瓦を焼くための窯です。その形態が「達磨さんが座禅しているような格好」をしているために達磨窯と呼ばれ、瓦の製造が盛んであった若草町加賀美でもこの達磨窯が盛んに作られ、多くの瓦を製造していたそうです。機械化の進む昭和の中頃からこの様な窯は取り壊されていき、現在では日本にはほとんど現存していません。この絵は江戸時代の銅版画家である亜欧堂田善の「今戸瓦焼図」という絵の一部分で、神戸市立博物館に所蔵されています。

鷹形町文化財調査報告書 No.19

前原 G 遺跡

——新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書——

平成12年2月24日 印刷

平成12年2月28日 発行

発行 鷹形町教育委員会
山梨県新環状・西関東道路建設事務所
編集 鷹形町教育委員会
山梨県中巨摩郡鷹形町小笠原397-1
☎ (055) 282-0108
印刷 ほおづき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎ (026) 244-0235㈹

